す。私と一緒にいるのは時間の無駄ですよ」

セレナは自分を卑下するように言った。

「そんなことないよ」

ミスエンジェルは落ち着いた口調でそう言い、セレナの隣に自然に座った。座るとき、胸元に少しだけ鎖のようなものが見えた。

「どうしてそんな格好をしているんですか？」

セレナは慎重に尋ねた。

「申し訳ないけど、しばらくは自分のことを言いたくない。こんな感じで世間話するくらいでいい？」

「この間、私に付いてきたのはミスエンジェルですか？」